

表 135 世界のとり類飼育数 (1991年)

地域別	飼育数		肉生産量	
	100万羽	%	1,000トン	%
アジア	4,693	42.4	9,990	24.4
北アメリカ	2,062	18.6	13,300	32.5
ヨーロッパ	1,252	11.3	8,257	20.2
旧ソ連圏	1,160	10.5	3,000	7.3
南アメリカ	924	8.3	3,920	9.6
アフリカ	884	8.0	1,895	4.6
大洋州	86	0.8	520	1.3
世界計	11,061	100.0	40,891	100.0

出所：FAO

表 136 世界のとり飼育数～主要国 100万羽

国別	1987	1988	1989	1990
中国	2,117	2,187	2,278	1,984
米国	1,226	1,393	1,460	1,460
旧ソ連	1,174	1,177	1,207	1,151
ブラジル	525	520	541	550
インドネシア	428	457	489	509
日本	343	334	334	338
インド	215	260	300	310
メキシコ	243	250	252	247
フランス	218	248	241	207
その他	3,804	4,029	4,055	4,305
世界計	10,293	10,875	11,157	10,770

出所：FAO

表 137 世界のとり肉生産量 1,000t

国別	1987	1988	1989	1990
米国	9,103	9,426	10,105	10,924
EC	5,784	5,995	6,123	6,371
中国	2,564	3,080	3,177	3,303
旧ソ連	3,000	3,235	3,300	3,300
ブラジル	1,970	1,950	2,080	2,417
日本	1,432	1,443	1,442	1,418
フランス	1,384	1,387	1,425	1,384
イタリア	1,023	1,076	1,102	1,104
英国	994	1,048	1,011	1,026
スペイン	797	828	831	836
メキシコ	707	689	640	783
タイ	540	582	623	661
南アフリカ連邦	535	546	548	551
その他	5,876	5,953	5,876	5,792
世界計	35,709	37,238	38,283	39,870

出所：FAO

上表にみられる通り、米国とECが世界生産量の43%を占める。中国と旧ソ連圏がほぼ同等の生産で第3位にあり、ブラジルが6%のシェアで続いている。工業先進国の中では、日本とカナダの生産も大きくそれぞれ世界生産の4%及び2%を占めている。東ヨーロッパ諸国（ハンガリー、ポーランド）も重要な生産国である。

ロ) 世界の消費傾向

世界のとり肉消費は、飼育技術の向上によるコストの低減によって世界の各国で増加をみえてきた。生産資材（穀類、大豆副産物、魚粉等）価格の低減も又養鶏生産の増加に寄与した。

国際機関の統計によると世界消費の70%以上は工業先進国に集中しており、中でも米国の需要がもっとも大きく、年間約11百万トンが消費されている。生産量の場合と同様にECが世界消費の2位を占めており、年間6,5百万トンが国内市場に向けられる。南米ではブラジル、アジアでは日本を最大の消費国とし、いずれも約2百万トンを年間消費する。

このいずれの国においても消費は増加しており、米国において年間5%、ECでも4,8%の需要増加振りである。1人年間の消費量は、米国の4.3kgを筆頭としカナダ(2.9, 3kg) EC(1.9, 2kg) 日本(1.4, 2kg)等の消費レベルが高い。この中、米国の1人年間消費量はこの10年間に55%の増加をみて、牛肉の消費量をしのいだ。日本、EC及びブラジルの1人当たり消費量は、80年代を通じていずれも35%の増加であった。

日本の場合、動物蛋白は魚からとるのを習慣としているが、所得の増加、ファースト・フードの普及から牛肉や鶏肉の消費が急激に増加しており、米国資本のKENTUCKY FRIED CHICKENやMAC DONALDS等鶏肉をベースとする軽食産業の進出が鶏肉消費の増加を促した理由の1つとなっている。

表 138 主要国におけるとり肉の推定消費量 1,000t

国 別	1989	1990	1991	1992
米 国	9,717	10,303	10,915	*
E C	5,855	6,065	6,400	6,630
ブラジル	1,832	1,950	2,308	*
日 本	1,717	1,700	1,766	
カ ナ ダ	727	772	780	795
南アフリカ連邦	564	560	572	567
オーストラリア	430	444	454	464
アルゼンチン	312	336	393	566
ポーランド	320	288	*	*
ルーマニア	250	264	*	*

出所：FAO *データなし

表 139 主要国におけるとり肉の1人年間消費量 Kg/1人/年

年 度	米 国	E C	ブラジル	日 本	カ ナ ダ	南アフリカ
1980	27.8	13.9	9.6	10.2	31.2	7.7
1985	32.1	14.7	9.1	11.2	24.7	14.9
1988	37.0	17.6	11.8	14.0	28.4	15.2
1989	39.3	18.0	12.4	13.9	27.8	14.9
1990	41.2	18.5	13.0	14.2	29.0	14.5

出所：FAO

ハ) とり肉の貿易傾向

とり肉の世界貿易量は年間約2,5百万トンで、その75%は先進国に集中する。国際間貿易量は総供給量の6,3%に相当する。世界の貿易量は少量であるが、近年増加をみせており、1980~91年間における生産の増加率が年平均5,1%であったのに対し、貿易量は年5,6%の増加であった。その増加率は開発途上国において9,9%と高く、工業先進国の場合は5%である。

1983~92年の10年間、とり肉の国際価格は上昇傾向を続けてきた。

最大の輸出国は米国で年間平均560千トンの輸出を行っているが、その量は世界輸出量の22%を占める。米国より輸出されるとり肉はその92%が肉鶏、5%があひる、残りがその他となっている。米国は伝統的にソ連への輸出を続けているが、92年には融資の引締めを理由として、対ソ輸出が大巾に減少、他の市場に対する輸出の増加により、この減少分がカバーされている。

ECの輸出量は全体の17%を占めて米国に次ぐ位置にある。EC輸出の中でフランスとオランダはそれぞれ42%及び32%シェアを占め圧倒的な立場にある。この両国は伝統的なとり肉の輸出国で、80年代中まで世界の1,2位を争っていたが、88年以降米国に抜かれ今日にいたっている。

ECのとり肉輸出は切斯ないままの鶏を主体としているが、小間切り肉の方も中東市場を中心として90年代に入ってより急速な伸びを見せている。

南米大陸ではブラジル特筆すべき位置にあり、世界第3位の輸出を行っている。東欧のハンガリーも伝統的な輸出国である。

現在、世界第5位の輸出規模を持つタイは、輸出増加率において注目すべき位置にある。最近では年8%の増加を続けており、日本市場に輸出の90%が向けられている。対日輸出が圧倒的に大きいのは、距離的に他の供給国よりも有利な位置にあることのほか、多くの日本企業が対日輸出を目的とした現地生産を行っているためである。

ブラジルのラテンアメリカ最大の輸出国としてサウジ・アラビアを始め、ペルシャ湾諸国（クエート、アラブ首長国、カタ）や極東諸国（日本、香港及びシンガポール）への供給を行っている。飼育技術は米国に類似し高い水準にある。

世界最大の輸入国は日本で世界とり肉貿易の12%が集中し、その輸入量は年間300千トン以上に達している。これに続いて旧ソ連圏の輸入が大きく、世界輸入の11%を占める。ECの輸入量も大きく、世界の主要輸入圏となっている。とくに英国、ドイツ及びイタリアの輸入が大きい。

とり肉貿易の可成りの部分が開発途上国にも向けられており、その代表的輸入国としてサウジ・アラビア及び香港がある。これらの国では国内生産の不足に加えて、購買力は高く、肉の需要とりわけ鶏肉の需要が高まっているため大型の輸入が続いている。この中、香港は米国及び中国よりの供給を受け、サウジ・アラビアへの供給国はEC（主にフランス）及びブラジルである。

表 140 鶏肉、主要5ヶ国の輸出シェア (%)

国 別	1980	1990
米 国	23,5	22,0
E C	44,6	17,0
ブラジル	11,7	11,9
ハンガリー	9,6	7,7
タ イ	1,3	5,6

出所：GATT

表 141 とり肉：主要国の輸出推移 1,000 t

国 別	1988	1989	1990	1991
米 国	381,0	398,3	554,3	635,6
E C	402,0	448,0	428,0	441,0

ブラジル	249,3	248,6	337,0	370,0
ハンガリー	240,6	178,7	194,2	165,0
タイ	97,9	110,6	141,6	*
ルーマニア	125,0	120,0	105,0	*
ブルガリア	36,5	35,3	16,8	*
ポーランド	15,9	17,2	14,5	*
その他	517,8	667,3	725,6	*
世界計	2.066,0	2.214,0	2.517,0	2.830,0

出所：FAO *データなし

表 142

とり肉：主要国の輸入推移

1,000 t

国別	1988	1989	1990	1991
日本	261,0	267,0	301,0	347,0
旧ソ連	178,8	136,1	260,0	289,0
サウジ・アラビア	192,1	194,4	220,0	*
香港	153,0	182,0	184,0	*
EC	103,0	115,0	138,0	145,0
カナダ	46,9	42,2	63,4	76,0
スイス	43,2	41,3	37,4	46,0
南アフリカ連邦	25,9	21,6	18,0	16,6
オーストラリア	15,1	16,9	15,8	17,5
その他	987,0	1.090,5	1.234,4	*
世界計	2.006,0	2.107,0	2.472,0	2.764,0

出所：FAO *データなし

二) 今後の傾向と予想

世界最大の生産国米国と、それに次ぐECのいずれも今後短期の中に生産を更に増加する傾向にある。ブラジルも又、国内需要を海外市場の需要に支えられて生産の拡大傾向が続くものと予想されている。これらに対し日本は国内需要の増加にかかわらず、生産コストの上昇により供給態勢は縮少しつつある。

世界的に鶏肉の消費は増大しているが、1人年間消費量の増加率は過去と比較して鈍い伸び率にあり、最近数年間は停滞の状況にある。消費の拡大がとくに観察されるのは開発途上国で、ブラジルの場合を例にとると、牛肉に比して安価な鶏肉の需要は継続して増加している。

旧ソ連圏については、鶏肉消費の増加が予想されているが、各独立国が米国の融資のもとに大量の輸入を行う保証はなく、大きな期待は持たれていない。

ブラジルは新しい市場の開拓を進めており中東市場への依存度を軽減しつつある。

中期の見通しとしては、生産コスト（とくに飼料用穀類価格）の軽減予想のもとに生産は継続して増加する見通しである。より高い生産性やより近代的販売形態の導入は更に時間を要するであろうが、飼料コストの低下は鶏肉価格を更に引き下げることを可能とし、肉市場でのシェアを高めることとなる。

1995年に対しては、現在の生産規模が11%増加することが予想されている。1人当り年間の消費量は西側諸国において継続して増加し、長期的にみても所得の増大や食習慣の変化によって、鶏肉需要は引き続き増加していく見通しであろう。

供給量の増加が工業先進国、とくに米国において計画されているが、他の生産国では輸出が大巾に増大することは期待されていない。

輸出品の形状については、丸ごとのものと各部分に切断したものの2つの種類があり、後者の割合が高まっている。ブラジルの場合、この方法は1985年頃世界の大型輸出国（米国、EC）の間で輸出に対する強力

な保護が始まった頃に現れたもので、米国にエジプト市場を奪われた対策として採用されてきた。ブラジルの ABEF（プロイラー輸出協会）によると、現在ブラジルが輸出している鶏肉の37.5%が切断肉となっており、62.5%が未処理のまま輸出されている。切断した肉は丸ごとの肉に比較して価格が1.5倍と高いが品質の要求度が高い市場、とくに日本に対する輸出はこの形態が多い。

とり肉の国際価格は年毎に、上下の変動を繰り返しており1983年を100とした指数で見ると1989年に124の最高価格に達したあと、91年に向って再び下降している。FAOのデータにもとづく価格変動の状況は次表の通りである。

表 143 とり肉：国際価格の変動

年 度	価格 US\$/100 ポンド	指 数
1983	29,20	100
84	33,40	114
85	30,10	103
86	34,70	118
87	28,50	97
88	34,10	116
89	36,40	124
90	32,90	112
91	31,11	106

出所：SEC.PROGRAMACION ECONOMICA ARGENTINA

6・2・2 メルコスールにおける生産と市場

イ) アルゼンチン

アルゼンチンにおける鶏肉部門は、肉の生産分野で牛肉に次ぐ位置にあるが、その生産高ははるかに低く、農牧生産高に占めた比率は、1980年において1.8%、1990年が2.1%であった。この期間中、上下の変動はあったものの成長は続いており、1990年における生産高は、1980年を3.5%上回るものであった。

国内消費は年間平均7.3%で増加しており、今日では国内肉消費量の15%を占めている。国内市場への供給増加に反し、海外への輸出は僅少、もしくは国内需要を満たすためメルコスール圏内よりの輸入も行われている状況にある。

国内の養鶏部門は110千人の労働力を動員しており、その中、約60%は生産部門に従事している。

生産構造は企業形態、半企業形態及び個人の生産者の3種の形態に分かれている。この中、企業形態は養鶏活動を始め、配合飼料工場、屠殺場、貯蔵、輸送及び販売を一貫して行っており、養鶏部門では個々の生産者との契約にもとづき、ヒナや配合飼料を供給して成鶏を受取る方法がとられている。この形態は20に満たぬ企業によって行われているが、国内の鶏肉取引ではもっとも大きな割合を占めている。

半企業形態は生産者のグループによって組織される組合で、ヒナや配合飼料を共同で購入し成鶏を工場に共同販売する方法がとられる。

第3の形態は、養鶏活動にかかわる購入と販売を個人で行っている生産者を指している。統計資料によるとこの部門も国内消費量の3分の1を供給する重要な部門である。

企業グループでの多国籍企業はCARGIL社1社で、他はすべて国内企業である。CARGIL社は5%の生産シェアを有している。これらの企業はメルコスールの発達に伴う新しい市場に対応すべく機構の再整備を行っており、中にはブラジルの大手企業と合併したものもある。

アルゼンチンの鶏卵部門に関するデータとしては次のものが発表されている。

●とり肉生産部門の労働力 120千人 中 鶏卵部門 30千人

●卵の年間生産量 13.140千箱（1箱30打入）＝394百万打/年

- 売上量 USS 315百万
- 産卵鶏一羽当り卵生産量 36

ロ) ブラジル

ブラジルは世界のとり肉生産国としては、米国に次ぐ第2の位置にある。その生産量は、8,4百万トンに達しており、1人年間消費量は3.2Kgと算出されている。ブラジルの養鶏は1960年代に米国やヨーロッパによりの優良品種の導入により生産性を向上し、以後国内外の需要に支えられて生産の増加を続けてきた。技術の向上と生産規模の拡大は生産コストの軽減を可能とし、国内市場に安価な肉としての供給を行っており、高価な牛肉に代る蛋白源として消費者の趣好を変えつつある。

年間の飼育数は約1.6百万羽で世界の8%に相当する。屠殺までの期間は体重が1.8Kgに達する45日間、体重1Kgに対し2Kgの飼料が消費されている。

国内市場において牛肉の代替えとしての消費を増加する一方、海外への輸出面においても80年代の始めに300千トンの輸出記録を残したあと減少し、90年代に入ってから、再び300千トン台の輸出量に戻っており、450百万ドルの収入を得るまでになっている。

輸出先市場はサウジ・アラビアを筆頭とする中東諸国が大半を占めてきたが、最近ではキューバーやアルゼンチン等ラテンアメリカ諸国への輸出も大巾に伸びている。ブラジルは米国とフランスに次ぐ世界第3位の輸出国であるが、米国とフランスが強力な輸出補助を行っているため、輸出市場を奪われており、その調停をGATTに提訴してきた。

表 144 ブラジルのプロイラー輸出推移

年 度	重 量 1,000 t	金 額 100万ドル	平均単価 USS/t
1983	289.3	242.2	837
84	280.3	263.5	940
85	277.1	242.9	877
86	225.6	222.2	985
87	210.8	215.9	1,024
88	236.6	235.0	993
89	235.0	262.0	1,115
90	297.0	324.0	1,091
91	314.0	387.0	1,232
92	378.0	456.0	1,206

出所：CACEX. BANCO CENTRAL

ハ) ウルグアイ

ウルグアイにおける養鶏活動も重要な部門の1つで、農場収入の11%がこれによっている。他のメンバー国と同様にウルグアイにおける鶏肉の消費方法は生又は冷蔵品が主で、冷凍品の消費は少ない。1人年間消費量は約9,1Kgと推定されている。工場施設は少なく、工業化は多く行われていない。

ニ) パラグアイ

1991年に行われた農牧センサスのデータによると同年における養鶏農家数は273,2千戸、81年センサスの農家数を21,3%上廻っているが、飼育数は81年を0,5%増の11,233,7千羽であった。国内の生産分布は首都アスンシオンを控える、セントラル県において最も大きく(1,769,7千羽)、イタプア、カアグアスー、サン・ベードロ各県がこれに続いている。

プロイラーの輸出入は、中央銀行の統計には単独で示されておらず(肉類全体の統計のみ)消費量に関する統計もないが、業界では1985/90年間の1人年間消費量を9,7Kgと推定している。

参考資料

DIAGNOSTICO DE COMPETITIVIDAD AGROPECUARIA DEL MERCOSUR TOMO 1, TOMO2	
GUILLERMO JORGE CAMPBELL	
ESTUDIO DE COMPETITIVIDAD : OLEAGINOSOS	アルゼンチン農務局及びFICA
: CERALES	全 上
: FRUTAS	全 上
: CARNE	全 上
: AVIAR	全 上
CENSO AGROPECUARIO NACIONAL	パラグアイ農務省
ESTIMACION DE LA PRODUCCION AGROPECUARIA	全 上
BOLETIN ESTADISTICO	パラグアイ中央銀行
ANUARIO ESTADISTICO 1991	ブラジル地理統計院
INFORMAÇÃO ECONOMICA	サンパウロ州農務局農業経済研究所
INTERCAMBIO COMERCIAL DEL URUGUAY	ウルグアイ中央銀行

報告書作成 1994年3月

THK CONSULTORIO ECONOMICA LTDA.

SÃO PAULO, BRASIL

JICA

